

通常学級における特別支援教育

～ソーシャルスキル&自尊感情を育む「伝わる言葉のかけ方」～

名城大学 准教授 曾山和彦

気になる子の存在が溶け込む学級・授業づくりのためには、学級に在籍する全ての子どものソーシャルスキルと自尊感情を育むことが大切である。具体的には、「人づきあいのコツを教える」、「自分にOKと言えるようにする」ということである。

本稿では、通常学級における特別支援教育を推進するために、先生たちに「伝えたい言葉のかけ方」、子どもたちに「伝わる言葉のかけ方」を紹介する。

「いいところ探し」による言葉かけ

「伝わる言葉のかけ方」の横綱と言ってよい。子どもの自尊感情育成に関係する。日頃、言動が気になる子どもに対しては、どうしても注意や命令が多くなりがちである。しかしながら、それだけでは、学級全体がギスギスしてくる。教師は、「いつでもどこでもリソース(資源、財産)、リソース」と呪文のように唱えるようにしたい。子どもたちのいいところ(リソース)を、自らの心にたくさん貯めておくことで、子どもたちの顔を見た瞬間に、そのいいところを子どもに伝えることができるだろう。

「対決アイメッセージ」による言葉かけ

子どものソーシャルスキル育成に関係する。子どもに身につけてほしいスキルとして、「話を聴く」というスキルを例に挙げる。授業中、おしゃべりの多い子どもはスキルをうまく使えない子どもである。その時、「静かにしなさい」等の注意をすることが多いのではないだろうか。この言葉かけは文脈に「あなた」が入る「あなたメッセージ」であり、お互いの関係性を破壊しやすいメッセージと言われる。一方、「私」を主語にして、問題を抱えた自分自身の思い(感情)を伝える言葉かけは「私メッセージ」であり、具体的には「(私は)困っているのだけど」等である。関係性を構築しやすいメッセージと言われる。教師の「思い」が伝わると、子どもは「はっ」としておしゃべりをやめることがあるだろう。その時、「ありが

とう」等の言葉をかけ、「話を聴く」ことの大切さを繰り返し教えていきたい。

「リフレーミング」による言葉かけ

枠組の再構成という意味であり、子どもの自尊感情育成に関係する。子どもの気になる言動で、「短所」と思われるものを「長所」に書き換えて心に貯めておくのである。例えば、「飽きっぽい」ならば「様々なことに興味関心をもつ」等へのリフレーミングが可能である。柔軟な発想で、一人一人の子どもを様々な角度から見つめてほしい。

「？」による言葉かけ

子どものソーシャルスキル育成に関係する。「あいさつをする」等のスキルを子どもがうまく使えていないとき、「あれ？先生との約束は何だった？」等、「？」をつけて言葉をかけるとよい。子どもが気づいて「おはようございます」と言ったときに、「きちんとと言えるね」と褒めることを続けると、やがてあいさつが自然と口になじむようになる。この言葉かけは、ある幼稚園のベテランの先生に教えていただいたものである。注意や命令の言葉よりも、はるかに温かな響きをもって子どもに伝わる言葉である。

教師の立ち居振る舞いは、子どもたちにとって「鏡」となる。本稿で紹介した言葉のかけ方を身につけた「ミニ先生」で教室がいっぱいになってほしい。きっとその教室は、気になる子の存在が溶け込む温かな学級となるだろう。

プロフィール

東京学芸大学卒業、秋田大学大学院、中部学院大学大学院修了。社会福祉学博士。東京都、秋田県にて養護学校教諭、秋田県教育委員会指導主事、管理主事を経て現職。全国各地の教育関連研修等の講師を務める。著書に、「時々“オニの心”が出る子どもにアプローチ 学校がするソーシャルスキル・トレーニング」(明治図書)等がある。